

## 5 卓球の思い出

### (1) 齋藤 悟

米沢地区卓球協会設立 60 周年誠にありがとうございます。心よりお祝い申し上げます。

さて、米沢地区外の間人である私にとって、米沢地区卓球協会との思い出はたくさんありますが、その中でも米沢地区からの分離を視野に入れた昭和 44 年の長井支部の結成と昭和 45 年の米沢地区から分離した東西置賜地区卓球協会の設立は忘れられない思い出になっています。

当時置賜地区の卓球協会は、米沢地区卓球協会一本で運営されていました。会長の白田虎雄さんや理事長の齋藤俊也先生を中心にして活発な協会活動が展開されていました。昭和 39 年～40 年の 2 カ年は米沢工業高校が山形県を制覇しましたし、米沢にはその他にも優秀な選手がたくさんおり、地区全体としても大変勢いがありました。当時は現在のように公営の体育館もなく、大会というほとんど学校の体育館を使用して開催せざるを得ませんでした。そのような状況の中、卓球人口も増加して置賜地区内での大会は参加者が多くなり、なかなか限られた日数で大会を消化するのが困難な状況になってきておりました。そういうことを加味して、まずは米沢地区卓球協会のご理解とご協力により、昭和 44 年 11 月、当時私の勤務校であった長井工業高校において、米沢地区卓球協会より白田会長さんを始め多くのご来賓をお迎えして支部設立

総会が開催され、長井市・白鷹町・飯豊町・小国町の 1 市 3 町をまとめ、後藤文弥さんを



支部長とした、米沢地区卓球協会の下部組織としての長井支部が設立されました。今から 37 年前のことです。

その翌年、矢継ぎ早に今度は山形県卓球協会、そして米沢地区を始め他地区の先輩協会のご理解を得て米沢地区卓球協会から分離し、県内 8 番目の地区協会として東西置賜地区卓球協会が設立されました。米沢市を米沢地区卓球協会の管轄とし、長井市・南陽市・川西町・高島町・白鷹町・飯豊町・小国町の 2 市 5 町を東西置賜地区卓球協会が管轄することになり、置賜地区が 2 つの卓球協会に分かれたのです。当時は協会の名称を置賜地区卓球協会とすると、米沢地区も含むので紛らわしいという理由から、頭に東西をつけ東西置賜地区とせざるを得なかったことなどが懐かしく思い出されます。その後しばらく経ってから米沢地区の役員の皆様のご理解を得て、昭和 57 年地区名の頭にあった東西を取ることができ、置賜地区卓球協会と命名され現在に至っています。

置賜地区の両卓球協会の歴史を振り返ってみますと、いろんなことが懐かしく思い出されますが、当時米沢地区卓球協会のトップにあって活躍されていた元会長の白田

虎雄さんや元副会長の西方常蔵さん、米沢家政高校（現米沢中央高校）の名コーチであった穂保洋策さん、そして東西置賜地区卓球協会の初代会長であった武者仁一先生は既に亡く、私はそれらの先輩方に、若かりし頃いろいろご指導を賜り大変お世話になっただけに、その頃を思い出すと感無量の思いがします。

また、米沢地区卓球協会の役員の方々との思い出もたくさんあり、私にとっては特にお二人の先生との思い出が忘れられません。

お一人目は、前米沢地区卓球協会長の齋藤俊也先生です。長らく米沢地区卓球協会の屋台骨を支えてこられた先生は、私にとっては高校時代（米工）の恩師（当時米工卓球部顧問）でもあり、高校時代はもちろんのこと、私が教員になり卓球に関わってきた中で、高体連・卓球協会等でもいろいろご指導をいただき大変お世話になりました。先生にはいつまでもお元気でこれからも我々を見守っていてもらいたいし、米沢地区卓球協会発展のためにも、今後一層ご活躍いただきたいと思っております。

お二人目は、現在の米沢地区卓球協会長の亀岡 剛先生です。先生と私は同世代であり、指導者としての現役時代に、私は長

井工業高校、亀岡先生は米沢中央高校卓球部監督として、長い間良きライバルでありました。お互いに生徒に突き刺さった指導が信条でありましたし、高い目標を持ち、負けたくないという気持ちで常に生徒と一緒に頑張って頑張り、長年置賜地区高校卓球界を引張ってきました。先生とは忘れられない悲喜交々のたくさんの思い出があり、それらのことが今でも本当に懐かしく思い出されます。亀岡先生には、米沢地区卓球協会のトップとして、持てる力を十分発揮され、なお一層ご活躍されますよう祈っております。

最後になりましたが、米沢地区卓球協会の今後ますますのご発展を心よりご祈念申し上げます。



## （２）齋藤俊也

私が初めて卓球をしたのは、戦時中に村の小学校でたまたまあった卓球台で友達と一緒に遊んだのがきっかけであった。

大学卒業後、米沢工業高校に赴任して何かの運動部の顧問をすることとなり、経験

のある卓球部でも良いか、という不真面目な理由だった。それが昭和28年で、当時置賜地区で強かったのが米沢商業高だった。米工高で



も、順次中学での強豪選手が集まるようになり、合宿など練習に励んだのであった。

目標を、まず5年後に地区優勝、更に5年後に県優勝と具体的に定めた。それでも何をして良いかわからずまず監督の勉強が先という事で、対外試合や県主催の強化合宿への積極的参加等、いろいろ生徒ともども研究実践を実施してきた。

その結果昭和33年に地区大会初優勝、昭和39年には県大会初優勝と順調な成績を残すことが出来た。以後地区大会は昭和42年まで9回優勝（昭和37年のみ米商優勝）し、県大会は昭和40年に連勝をしている。

特に思い出されるのは、昭和38年に当時東京の大学では既に流行っていた「ループドライブ」なる技術で、強烈な回転力があり、それを懸けるときのテクニックとレシーブの技術を、県の強化合宿で直接大学の選手から教えて頂いたのが非常に為になったことを今でも鮮明に覚えている。

監督としても、選手以上に勉強をしなけ

ればならず、他の監督とも交流して、互いに切磋琢磨しなければならない。勿論選手とも普段からよく接触を持ちながらその性格を熟知し身体の健康管理を含めて、心技体の指導に万全を期すことが重要である。

昭和46年に、米沢東高校に転勤。やはり卓球部の顧問となり、地区大会では昭和52年まで7連勝をしている。その後昭和59年に長井高校に転勤するまでの13年間の勤めで特に印象にあるのは、昭和55年の県大会で女子ダブルスに優勝をしたことである。山形城北高が全盛時代に一角を崩すことは特筆すべきものであった。

昭和63年に米沢興譲館高校に転勤となり、また卓球部の監督（女子）となったがこれも選手に恵まれ、昭和63年に県大会女子シングルスと女子ダブルスで優勝をしている。

平成4年に定年退職したが卓球監督39年、本当に選手や先輩・同僚・仲間に恵まれ、卓球に関係したのものとして有意義な幸せな人生だったと感謝している。

### (3) 尾崎辰雄

昭和58年、宮内高校を最後に教職を辞して、早いもので20有余年が経過しました。

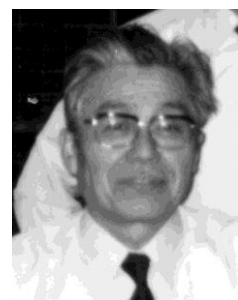
協会には大変お世話になり、いろいろな思い出がよぎっています。

昭和26年から玉庭中学校で、二年間島貫琢也先生と共に卓球部の顧問をやり、渡部修爾君（米商に進学、県大会で優勝）や島貫光子さん姉妹の指導法を見て、昭和28年に南原中学校に転勤、3年目の昭和31年米沢中学校の大会で、（故）金藤圭子さ

ん（米東に進学、皇太子御成婚のお祝いを生徒会長談として新聞に記載された。）

を中心とした常勝米沢二中（高橋勝広先生顧問）に団体決勝戦で勝ち、初優勝して生徒と一緒に小躍りした事が、今でも忘れられません。

南原中学校女子団体は毎年優勝し、8連覇を達成し、その後、上郷中・四中が強く



なりました。

私は昭和 39 年米沢商業高校に転勤、太田先生の後を継いで（太田先生は米沢東に転勤）卓球部の顧問になりました。この年入学した伊藤誠二君、高梨善広君、高木公四郎君達と巡り合い、卓球の虜になりました。

昭和 39 年といえば県大会が米沢で開催されました。当時、米沢工業高校の全盛期で団体戦・個人選ともに優勝。特に個人選優勝の木村稔君の中学校の後輩の伊藤誠二君・高梨善広君は大いに刺激を受けたと思います。

置賜地区大会では、米商・米工が激しくぶつかり、団体戦では地区大会優勝はできませんでした。誠二君は「団体では優勝できなかった」と今でも悔やんでいます。

ただ昭和 41 年の県大会では、日大山形高校と決勝あたり 2 対 3 で惜敗したことが私の脳裏から消え去ることができません。個人選では伊藤誠二君が優勝、高梨善広君が第 3 位、ダブルスで伊藤・高梨組が優勝し、青森市で行われた全国大会に 2 名も出場できたことが、せめてもの慰めとなっています。

この年の秋に国体東北ブロック予選会が山形市で開催され、伊藤君が山形県選抜（青木先生が監督）の一員となり健闘。個人選では団体優勝の青森商業のメンバー（久保・工藤・中村のトリオ）を破り決勝戦まで進み、全国大会 3 位の熊地君に惜敗、昭和 42 年度東北高校卓球ランキング第 2 位となり、本人も満足であったと思います。

その後、伊藤・高梨の時代が終わり、昭和 43 年の県高校新人大会で団体優勝。八戸市で行われた東北高等学校選手権大会に出場し、青森山田高校と対戦し 2 対 5 で惜敗

しました。個人シングルスでは金子が出場し、男子ダブルスでは金子・小川組が準々決勝に進出しました。翌 44 年にも県新人大会で準優勝し、秋田市で開催された東北高校選手権大会に寒河江高校と共に出場し、金子・小川組のダブルスも出場して大いに気を吐いた。金子隆は「昭和 42 年までは米工に勝つことはできなかったが、43・44 年にやっと勝つことができた」と喜んでいる。

特に 44 年の県大会が高島町で開催されましたが、山形新聞の予想欄には米商が優勝の一番手に挙げられ、私も生徒も固くなり、実力が発揮できなく優勝を逃した事が今でも頭の片隅に残っています。

ここまで男子のみを書いてきましたが、女子も私が米商に赴任してからは徐々に強くなり、昭和 45 年以降は米東・米沢女子高（現九里学園高校）と競り合うまでに成長してきました。

また、今の市民総体卓球競技に南部チームの一員として、小笠原先生ご夫妻・佐藤与志夫さん・（故）皆川頼郎さんと共に、第 1 回大会で優勝した事が懐かしく思い出されます。

長い 50 余年、多くの方々と出会い、お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

まだまだ書き足りないことも沢山ありますが、今後ともお付き合いのほど、宜しくお願い致します。

#### (4) 石山勘一

高校の卓球部顧問になってから、今年で31年目を迎えた。

置農を皮切りにそこで6年、米商で5年、高畠で7年、米東で13年目である。協会との関わりも、最初は置賜地区卓球協会の役員をさせてもらっていたが、米商に転勤してからは当協会にお世話になることになって、現会長の亀岡先生の元で事務局のお手伝いをさせて戴いた。

高校の卓球部の指導者として、これぞといった成果を上げたわけではないが、30年間も切れ目なく顧問を続けられたのも、両卓球協会のおかげと思って感謝している次第である。

昭和57年に私は米商に転勤になった。転勤になったというより、指導者がいなくなったのを知り、希望しての転勤であった。さっそくこの年の夏、男子と女子に分けて合宿を2回行った。しかし、夏休み明けの9月中頃、非常に疲れる。すぐ座りたい気持ちになる。そんな折、夏休み期間中に受けていた1日人間ドッグの結果が届いた。封を切って中のものを見てみると、「肝機能の数値が高いので精密検査を受けなさい」というものであった。35歳の時である。早速、東北中央病院に行ってみると即入院であった。幸い3ヶ月程度の入院ですみ、職場復帰をすることができた。

その後、前年に、若干の新生入生を補強して臨んだ昭和61年春の地区高校総体、確か女子団体準決勝だったと思う。米東（現勤務校）に2対1でリードして迎えた四試合目、米商はただ1人の3年生キャプテン

Iであったが、接戦の末負けると泣き崩れてしまった。すると、数名の後輩たちも連鎖反応的に泣き崩れてしまったのである。

その年は部員不足で5試合目にマネージャーをエントリーしていたので、これで2対2であるが、実質上、負けが決まったからである。新たな部員を補充して臨んだこの年の秋の地区新人大会において、準決勝で米沢女子校（現九里学園）、決勝で米東を破り、念願の優勝を果たすことができた。後にも先にも高体連の団体戦で優勝を経験したのは、この時が最初で最後になるかもしれない。

また、忘れることができないのは一流選手を呼んでの卓球講習会である。昭和何年であったかは定かではないが、今は亡き長谷川信彦選手による講習会は、今でも脳裏に焼き付いている。この講習会の数年後だと思うが、斎藤清選手と嶋内よし子選手の元両日本チャンピオンによる講習会も記憶に残っている。この時、2人は結婚前であったが、2人が結婚したことを耳にしたのはこの直後である。こういう講習会が、その後の私の指導に大いに役立ったのはいうまでもない。その嶋内氏も、今は帰らぬ人となってしまった。長谷川・嶋内両氏のご冥福を心からお祈りいたします。

米沢地区卓球協会に関わる思い出の一端を綴らせて戴きましたが、最後に当協会設立60周年を祝し、当協会がますます発展いたしますことを祈念し、筆を置かせていただきます。

## (5) 大滝勤

米沢地区卓球協会の設立60周年、誠に  
おめでとうございます。また、ながきに渡  
り協会の運営に携わっていただきました、  
諸先輩方の皆様にまずもって感謝いたしま  
す。

私が教員として当地区協会にお世話にな  
りましたのは、今より20年前の昭和61  
年の4月です。当時は九里学園ではなく、  
米沢女子高等学校という校名でした。その  
ころは、たくさん部員はいたのですが、ま  
だ県大会にも出場できない力のないチーム  
でした。市内には、県大会で活躍していた  
米沢東高校や米沢商業高校の壁が大変高く  
感じられました。また、強い選手を集めよ  
うとしてもまったく見向きもされず、とり  
あえず在籍している選手で県大会出場、県  
大会ベスト8を目標に、毎日練習に励んで  
いたことを思い出します。

1年目は、選手たちが私の練習スケジュ  
ールにやっとなついてくるだけで精一杯でし  
たが、二年目の昭和62年秋の大会で県大  
会ベスト8、昭和63年春の県大会で団体  
3位、個人戦で初の東北大会出場を果たし



第18回全国高等学校選抜卓球大会 平成3年3月27～28日 於 山形県長井市

ました。また、全日本選手権山形県予選の  
女子ダブルスにおいて、渡部紀子・今井瑞

葉組が優勝  
し全日本選  
手権に出場  
しました。



あれから20年、インターハイ、全日本  
選手権、国民体育大会、全国選抜大会当の  
全国大会に出場することができました。そ  
の中でも、平成4年にべにばな国体に出場  
した高石恵理選手（国体第5位）平成6年  
に香川国体に出場した小倉亜紀選手（国体  
第5位）平成13年全国高校選抜大会個人  
の部に出場した高村美知子選手（第6位）  
平成15年全国高校選抜個人部の部に出場し  
た荒井直子選手（第10位）が主な全国入  
賞です。

平成14年からは男子卓球部を創立しま  
した。現在は男女の部員育成に取り組んで  
います。また、平成17年春には男子に、  
平成18年春には女子にそれぞれ中国から  
の留学生、李午龍君・崔馨月さんを招き卓  
球を通じての国際交流と部員の技術向上を  
はかっています。

李君は今年度、シングルス・ダブルスにお  
いて男子初のインターハイ出場を果たしま  
した。一緒に毎日練習している九里の選手  
達は、様々な面で刺激を受けています。こ  
のようなチャンスを生かしてこれからも九  
里学園から全国へはばたく選手がたくさん  
育ってほしいものです。

最後に私事ですが、20年という歲月、  
私なりに卓球を通じて「教育」を行ってき  
たつもりです。そのことの中の少しでも次  
の世代に脈々と伝わって行けたらと願って

います。たくさんの教え子達が各方面で活躍しています。教え子の子供達もまた卓球をはじめたりしています。このような瞬間に出会えたとき、何ものにもかえることのできない喜びを感じる年頃になってまいりました。これから先は監督生活の集大成と

して「まとめ」をしっかりと終わりたいと思います。

末筆ながら、このような寄稿のチャンスを与えてくださいました方々と、日頃より応援して下さっている九里学園卓球部後援会の皆様方に感謝申し上げます。

## (6) 高橋勝廣

米四中は45年前の昭和37年、一中・二中・三中から編入の2年生と四中入学1年生の2学年で実質開校した。開校当時は、体育館もグラウンドもなく、全校行事は屋上で、運動会は米一中をお借りした。卓球台は空き教室2室に2台ずつ入れた。狭い教室に2台なので、サイドとバックにスペースがなく窮屈な練習を強いられた。練習できないよりましだと不平不満は聞こえてこなかった。翌昭和38年には、体育館・グラウンドも完成した。昭和40年には、窪田中が統合され、卓球部員の人間関係を心配したものだが、トラブルや偏屈な先入観も見られず、協調性が随所に現れ、よい交友関係に一安心したものだ。 「われら四中一つの玉に」のスローガンを合言葉に学校全体が活気に満ちていた。米四中卓球部の堅固なきそは開校4年で出来上がり、県南に米四中ありと認められるようになったのはこの昭和40年ごろだと思う。

屋上からは、吾妻・飯豊・蔵王・月山・朝日・祝瓶・白鷹の山々が一望でき、遮るものは何もなく、眺望絶佳とはこの風景を指すといえよう。旧国道13号線は車の往来がまばらで、学校～窪田家中3km区間は手頃なマラソンコースだ。屋上・グラウンド

・体育館の環境に恵まれ、



体力・精神力をつけた生徒は将来どんな苦難も越えるだろうと確信していた。

8月には日中の猛暑を避け、朝5時半～7時の練習に切り替えた。週1回は「朝飯会」を開いた。宿直の用務員さんにご飯を炊いてもらい、女子部員がおにぎりを作る。朝もやの屋上でほおぼる。一汗かいての空腹に、水も味噌漬けも「おいしいおいしい」の連発だった。

市中体めざし、どの学校も猛練習だったので、数多くの練習試合にこちらから出かけ、来てもらってと忙しいものだった。県大会の出場は地区から団体1校・シングルス2名・ダブルス2組の枠だった。県大会でのわが四中の成績は次のようだった。昭和39年団体男子優勝。昭和41年団体戦男女共に優勝。シングルスでは、女子が昭和39年と40年に優勝。なお、昭和41年には男女とも県代表で東北大会に出場したが3位だった。

卓球協会はYSP杯・ニッタク杯を開催して、誰でも出場できる広い門戸だったので、

大変好評だった。1年生も2年生もレギュラーの3年生も力を試す良い機会と割り切っていた。中体連卓球には、市大会・地区大会・新人大会があり、県大会もある。米沢市中体連の卓球専門部長で、事務局長の小生は、責任を持って運営するわけだが、大会の都度、米沢地区卓球協会への協力要請を行ってきた。進行・審判長・審判員・記録・オーダー用紙・用具一式、何から何まで引き受けて運営していただいた。今でも忘れることができない。

米四中卓球部会(昭和 37~42 年)と年度

毎の会にも招待されるが、「おれ」「おまえ」「お宅」と男女の区別なく、飲んで・歌って・爆笑、童心に返っての姿は実にほほえましい。

選んだ道はそれぞれだが、団塊世代にあるすべての生徒等は、少年時代卓球を通して培った気力・体力・マナーで今重要な社会的地位にあって活躍中。やがて定年を迎えるわけだが、年金生活に甘んずることなく、仕事を続けてほしい。そして、介護・支援にいつまでも無縁で、健康な生活が送れるように願ってやまない。

---

## (7) 佐藤敏夫

### 1 はじめに

「ヤッター！」足立幸一郎選手のスマッシュが相手校選手(余目中)のコートにつきささった。背後でサポーターの先生方、保護者の皆さんが一斉に拍手。だき合ってよろこぶベンチの仲間の選手。13年目にしつてやっと県の頂点に立つことができた。私には目に涙がにじみ感動で身体がふるえた。

昭和44年7月下旬、山形県中体連卓球大会学校対抗男子団体の部で米沢二中がはじめて優勝した瞬間だった。

「念ずれば花開く」「先憂後楽」「継続は力なり」をモットーに360日、子どもたちと励んだ卓球の日々…。“練習はウソをつかない”昭和31年~平成6年の38年間の教員(顧問)生活で県大会男子3度、女子団体4度、計7度の県制覇。余勢をかって昭和46年8月、山形県営体育館で実施された第一回東北中学校卓球大会で青森

県の東目屋中、秋田県の大曲中等の強豪を破って東北チャンピオンになり、その後全国中学生卓球大会に数回の出場をはたした。

### 2 38年間中学の顧問として

#### (1) 屋代中(現高島二中)時代

…昭和31年~34年

##### ア) 昭和33年7月

・学校対抗男子団体県3位

<鈴木, 近, 安部, 皆川の各選手>

#### (2) 米沢二中時代…昭和39年~50年

##### ア) 昭和44年7月

・男子団体県優勝<足立, 宮村, 角屋, 渡部, 吉田(健)>

##### イ) 昭和45年7月

・女子団体県優勝<広居, 遠藤(法), 清水, 菅の, 土方>

・女子ダブルス県優勝

遠藤法子, 清水幸子

- ・男子シングルス県優勝…西山義則
  - ・男子ダブルス県優勝  
吉田健一，西山義則
  - ・         〃         2位  
吉田憲也，安達 茂
  - ・男子団体県2位<吉田，西山，市村，  
安達，高野，永井>
- ウ) 昭和46年7月
- ・男子団体県優勝<鈴木(孝)，大木(弘)，  
黒金，加藤，梅木>
  - ・男子シングルス県優勝…鈴木孝行
  - ・男子ダブルス県優勝  
鈴木孝行，大木弘一
  - ・女子団体県優勝<早坂，安部，杉浦，  
加藤，佐藤>
- エ) 昭和46年8月 第1回東北中学校卓球大会(山形県営体育館)
- ・男子団体東北優勝  
<鈴木(孝)，大木(弘)，黒金>
- オ) 昭和46年8月 第2回全国中学生卓球大会(東京中野体育館)
- ・男女ともコーピロン方式(監督1，  
選手2)で団体戦を行い予選リーグ  
で敗退。
- カ) 昭和48年7月
- ・女子団体県優勝<藤倉，三宅，大木  
(千)，今成，山口，宮口>
  - ・女子シングルス県優勝…三宅良美
  - ・女子ダブルス県優勝  
三宅良美，藤倉恵久子
  - ・男子シングルス県優勝…池村春彦
- キ) 昭和48年8月
- ・第4回全国中学校卓球大会に女子団  
体が出場
- ク) 昭和49年7月
- ・男子団体県優勝<鈴木(信)，大金，  
有坂，舟山，黒田>
  - ・女子団体県優勝<安部，高橋，寒河  
江，遠藤，小松>
  - ・女子シングルス県2位…高橋
- ケ) 昭和49年8月
- 第4回東北中学校卓球大会
  - ・男子団体…東北3位
  - ・女子団体…東北ベスト8
- コ) 昭和49年8月
- 第五回全国中学校卓球大会(新潟体  
育館)
  - ・男子団体，女子団体が出場
- (3) 米沢四中時代…昭和51年～55年
- ア) 昭和52年7月
- ・女子団体県優勝<佐々木，相田，三品  
寺，伊藤，高野，安藤>
- イ) 昭和52年8月
- ・第8回全国中学校卓球大会に女子団  
体で出場(名古屋：愛知体育館)
- ウ) 昭和53年7月
- ・女子団体県優勝<二階堂，金井，加  
藤，渡部，鈴木>
  - ・男子団体県3位<斎藤(俊)，加藤，  
渡部，佐藤，桜井>
- エ) 昭和53年8月
- ・第8回東北中学校卓球大会に出場  
(秋田)
- オ) 昭和53年8月
- ・第9回全国中学校卓球大会に出場  
(北九州市立総合体育館)
- 特に印象に残っているので戦の成績を述べたい。
- ・女子団体予選リーグ第2位で決勝ト  
ーナメント進出のチャンスをのが  
す。

- 1 回戦 米沢四中 3 - 1 米子一中 (鳥取 1 位)
- 2 回戦 米沢四中 3 - 1 城南中 (福岡 1 位で、前年度日本のチーム)
- 3 回戦 米沢四中 2 - 3 大久保中 (大阪 1 位)
- (4) 米沢五中時代…昭和 56 年～61 年  
・毎年、男女とも団体や個人戦に出場
- (5) 米沢三中時代…昭和 62 年～平成 6 年  
ア) 昭和 62 年 7 月  
・男子団体県 3 位 <栗野, 清水, 平賀, 赤木, 竹田, 松田 (和) >  
イ) 平成 3 年 7 月  
・女子シングルス県ベスト 8…蓼沼裕美  
ウ) 平成 3 年 8 月…女子シングルス(蓼沼) で八戸での第二十一回東北中学校卓球大会に出場。

- 3 退職後、ボランティア活動の一環として
- (1) 米沢三中のコーチについて…平成 8

- 年～18 年  
ア) 平成 15 年 7 月  
・女子団体県ベスト 8 <平間絵, 渡部, 南齋, 鈴木, 伊藤, 羽賀 >  
1 回戦 米三中 3 - 1 山寺中 (山形 1 位)  
2 回戦 米三中 0 - 3 酒田五中 (飽海 1 位)  
イ) 平成 16 年 7 月  
・女子団体県ベスト 8 <明石, 鈴木, 遠藤, 吾妻, 渡部, 秋葉 >  
1 回戦 米三中 3 - 2 金井中 (山形 1 位)  
2 回戦 米三中 0 - 3 河北中 (西村山 1 位)

#### 4 おわりに

幼い頃、遊び感覚でピンポンに夢中になり、昭和 31 年 6 月、屋代中に奉職してから現在迄役 50 年間、白球から離れられない生活を送っている。その間、よい選手、よい環境、良き指導協力者にめぐまれ日々、よろこびと生きがいを感じている今日この頃です。

## (8) 高山孝吉

この度、『米沢地区卓球協会 60 周年記念誌』を発行するにあたり、心から敬意を表し、お祝いを申し上げます。併せて卓球スポーツ少年団活動の思い出を書き添えます。

米沢市卓球スポーツ少年団には、各小学校から多くの子ども達が集まり、練習も仲良く楽しく団活動を行ってまいりました。

卓球の技術向上、礼から始まり礼に終わる、という指導が中心でした。一時期団員数も 60 名近くになり、手の届かない部分もあって、体育館の中を走りまわる子もいました。しかし、こうした行動も子どもの特権



であり、ことさら叱ることもなく伸び伸びと接してきました。中には、コートから決して離れない子、いつもボールを拾ってくる子。どんな家庭教育を受けているんだろうと感心したものです。みんな良い子ばかり。いろんな子ども達に、わけ隔てなく接してきました。

初代団長の小笠原さん、2代目の佐竹さん、そして私が3代目になりますが、このころ既に団活動が定着しており、昭和62年頃には父兄会も組織され、大会への遠征や応援、また運営面でも多大なご協力を頂き大変助かりました。

試合の方も、市内大会は勿論、置賜・山形・鶴岡と参加してきました。不安や期待感も混じり緊張して普段の実力が出し切れない子、相手によるのか実力以上の力を発揮する子、負けても平然とする子、にこにこ戻ってきて「勝ちました。」と報告する子。負けても勝っても、子ども達にとっては精一杯頑張った結果であり、「よく頑張ったね」と褒めてやりました。

出来る事なら、全員に勝たせて喜びを与えてやりたい気持ちで一杯でしたが、山形・鶴岡地区は卓球少年団というよりクラブチームでレベルが高く、容易に勝てる相手

ではありませんでした。ただ、大会に参加する事で、何かを受け止め、感じてくれることを願っていました。

そうした中でも、子ども達は立派な成績を収めていました。昭和63年頃には、こうした団の活動が認められ、市から運営費として10万円の大金を頂きました。市に認められたことにより、“今後もしっかりと団の運営を努めよう”と心を新たにしました。

私自身、毎週日曜日に子ども達と接する楽しみもありましたが、子ども達も自分の意思で卓球に打ち込み、休む子どもは少なかったように思います。いま思えば、納会ではほとんどの子が皆勤賞・精勤賞を受賞し、子ども達はもとより父兄の皆さんや指導員の方にとっても、この上ない喜びでした。

10数年間、子どもから孫の年代までの数百人の団員に接し、ことさら問題もなく指導できました事に対し、関係者の方々に心よりお礼申し上げ、思い出とさせていただきます。

## (9) 板垣健二

米沢地区卓球協会が設立60周年を迎えるに当たり、一言お祝いを申し上げます。

設立された当時のことは想像でしかありませんが、日本は戦後の復旧期であり、暗く辛い時代に一光の明るさを求め設立されたもので、当時の設立者の方々の情熱と努

力と苦  
労と、  
そして  
協会を  
支えて



くれた方々の協力があったからこそ創り得

たものであろうと考えます。この間の一つ一つの出来事の積み重ねが60年間の歴史であり、人間で例えると還暦であり成熟した現在の協会の姿であると考えます。本当におめでとうございます。

さて、当クラブチーム「松田道場」について少々ふれさせていただきたいと思えます。

松田道場は今から20年ほど前に設立者自らが若かりし頃から打ち込んできた「卓球」というスポーツの面白さとすばらしさを我子を含む子供たちに教えたい伝えたいとの思いで立ち上げたと聞いています。当時は練習をする場所を確保することが困難で、現協会副会長の松田先生に相談したところ、ご自宅の1階にある卓球場を快くお貸し願えることになり、ようやく活動の拠点ができたことでクラブチーム名も「松田道場」と命名したと聞いています。

この20年の間には良きにしも悪きにしも数多い思い出があります。

まずは何と言っても継続は力なりの言葉の通り、20年間続けて来れたということであると思えます。この間に巣立った子供たち（現役含む）は80名を超え、全日本選手権ホープス・カブ・バンビの部のキップを手中にし両親を旅行に連れていった親孝行な子供もいれば、また悲願の全国・東北高校総体を目標に努力を重ねて見事出場を果たした子供、卓球は中学校までとし目標を市内大会優勝と決めて有言実行した子供、試合で負けては泣きじゃくり次の試合での勝利を誓う子供、小学校低学年の頃は練習には来たものの帰るまで毎回ソファにグッスリ寝てしまう子供等々、そんないろんな思い出が頭を過ります。どの子供にも共通して言えることは卓球が大好きな子供たちであるということです。できれば、この子供たちが大人（親）になり（既になっている子供もいる）自分が歩んできた道を自分の子供たちに教えられるような土壌を作りあげ、何時までも長く続く「松田道場」としたいものです。

---

## (10) 秋葉真治

今年、私は満で83歳になった。

そもそも卓球(Ping Pong)を選んだのは、米沢商業時代に遡る。戦時中だった関係で、教練(軍事訓練)は勿論、柔道、剣道は正課になっていた。その外に運動部の1つに入部しなければならなかった。そこで何を選ぼうかと思案、野球にしようか、庭球(テニス)にしようか。(冬の部はスキーに決めていた。スキーは小学校の時に市内学校対抗

のリレーメンバーになっていたので、躊躇なく選び距離の方に決めた。この事が今後卓球をする上で非常に役に立った。それはスキー部の夏練習で陸上の100mのスタートダッシュ、中距離1,500m、マラソンと卓球の合間をみて鍛えたので卓球のフットワークに役に立つこと大でした。)

卓球を選んだのは、貞子姉さんが女学校の卓球部にいたし、家に卓球台(普通の薄い

杉板で作ったもの)があって、いたずらをしていた事を思い出し、あ〜卓球にしようかな〜と、こんな程度で決めた様だ。

いざ卓球部に入部して聞いた事は、この米沢商業卓球部は山形県では伝統ある部で先輩達は全国優勝を初め過去数年、負け知らずと知らされビックリした。

ところで一緒に入部した人は20数人で、練習場は雨天体操場(今でいう体育館、そのころは勿論電灯なし)を半分が剣道部、あと半分を卓球部で使用。卓球台は2台だった。(今は無いが日本式といってボールは軟球、コートの大さは今のより2cm位小さかったと思う)そこで先輩達は1台を使い、我々新米はあと1台を数人で使うわけですから、順番がなかなか来ない。1セット11本勝てば、続けて2人までは出来た様な気がする。そうして毎日放課後3時頃より5時頃まで練習をしていた。そして日がたつにつれ、新入部員はだんだんと抜けて行き、やはり何とか生き残るのは1学年で2、3人かな？

私の学年では汽車通で、宮内から来ていた横山君と私の2人が、2年生の時、選手要員になれた。その後はコートも先輩達(選手)と一緒に練習できる様になり、練習時間も毎日ボールが見えなくなるまで続けた。間もなく地区大会にも出される様になり、練習は益々激しくなって、学校当局も県No1となると考えてくれて、裸電球を1個か2個だったか忘れたが、設置してくれた。それからは7時過ぎまで、来る日も来る日も猛練習が続いた様な気がする。(このお蔭で身体も丈夫になり5年間で2日だけそれも腹痛で休んだのみで精勤賞を貰った。)

その頃のラケット(最初はピンポンのヘラと言っていた時代もあった)は、木のラケットで、間もなくコルク張りになった。これが何年頃まで続いたか?とにかく初めて県代表になって東京の大会に出場したとき買ってきたラバーというのが、戦時中ですからゴムと言えるかどうか?と云う代物で縦・横の線がついているだけの、厚さ1mmもないものでした。それを得意気に少しの間使った様な気がする。その頃の大会は今では想像も出来ないが、大会がある時は会場へ各学校からコートをリヤカーで運び準備していた。・・・(時代を感じますネ)

これだけ卓球をやっても、今振り返ってみると、県大会では度々優勝していても全日本として見た場合これといった成績を挙げられなかったが主な記録は次の通り。

- ◎ 昭和15年 紀元2600年記念  
第11回明治神宮国民体育大会(東京) 出場
- ◎ 昭和24年 全日本卓球ランキング  
軟式一般男子 第16位
- ◎ 昭和26年 全日本卓球ランキング  
軟式一般男子 第15位
- ◎ 昭和27年 第7回国体(仙台市)  
一般男子団体 準優勝  
(国体出場は昭和21年第1回から昭和28年第8回まで連続出場他に昭和39年第19回と昭和41年第21回に出場)
- ◎ 昭和44年 全日本卓球ランキング  
軟式ベテラン 第5位

それぞれの大会には多くの思い出があるが、特に昭和15年紀元2600年記念第11回明治神宮国民体育大会の出場は、我

々選手憧れの明治神宮大会であるので（高校で云う甲子園出場みたいなもの）非常に誇り高いものでした。全校生徒や先生方の前で、朝礼台に上げられ、壮行会を行って貰い、夜行の10時過ぎ頃の列車だったと思います。ホームで数十人に見送って頂いて感激でした。

次は、終戦翌年の昭和21年度第1回国民体育大会の時、リュックサックや毛布、お米持参での参加。米沢駅より乗車するのに乗降口よりは満員で乗れないので、窓から引っ張り上げて貰い、山形県選手団卓球部の監督（鶴岡の斉藤氏）が満員の中かき分け乍ら私の名前を連呼して探しに来て下さった事が思い出されます。その列車の夜が凄いい光景で、相撲部の連中が「回し」を

吊棚から吊棚へ渡して、その上で寝ていた状態。集合場所は東京品川駅だったと思う。この第1回大会は今の都道府県対抗でなく、個人戦だった様な気がする。

成績はこの程度ですが、自分としては十二分とまではいかないが、これといった怪我也せず今まで続けてこれたこと、また現在も楽しみながら好きな卓球を続けてゆける事は、家族の協力無くしては到底出来る事ではないので非常に感謝している。また周囲の仲間の皆さんにも非常に何かとお世話になりました。これからも更に続けてゆける様頑張ってゆきたいと思っています。

- 実力伯仲、されど勝負はある
- 運も実力のうち

---

## (11) 小笠原まさ子

S23.5 米沢第四高等学校（現米沢東高校）1年、卓球部へ入部。戦後の混乱期ではあったが、少しずつ世の中が落ち着きを取り戻し、スポーツでは卓球がビッグスポーツであった。当時山形県ランキング第1位の秋葉真治さんをコーチに迎え、強化練習が始まった。「正しいフォームを身につけないと上達しない」というコーチの指導のもと、昭和22年4月の校舎火災から焼け残った教室を練習場にして、素振り・基本練習・フットワークを徹底して練習した。約4時間の厳しい練習のため、倒れた部員もいた。物のない時代だったため練習はいつも裸足、ズックは試合用であった。

S24.10 第4回東京国体に初めて代表と

なる（高2）。365日練習に明け暮れた毎日であった。今振り返ると、よく耐えられたものと思う。東京での宿舎はYSP（卓球メーカー）の寮で、大部屋に男女数人雑魚寝であった。風呂は庭の片隅にあり、屋根も洗い場もなくドラム缶の五右衛門風呂で、入るのに苦労した。

S25.5 全日本軟式卓球選手権山形県予選会（高3）で優勝。代表権を取ったが、個人選であるため学校の許可が得られず全国大会出場を断念した。この年の軟式卓球選手権山形県予選会は3冠だった。

S25.5 都市対抗マッカーサー杯卓球大会で米沢チームが山形県大会で優勝。県代表で東北大会（秋田）に出場。一般、学生、男女混成チームで監督（兼選手）

は当時山大工学部の小林教授であった。

S25.7 毎日の厳しい練習が実を結び、インターハイ山形県大会で団体優勝。東北大会団体3位で、夢の全国大会出場を勝ち取った。全国大会（京都）では2回戦で大阪東船場高校（主将は後の世界チャンピオン江口富士江さん）に惜敗した（選手：関まさ子、小島貞子、武田チエ子、後藤美代子）。



インターハイ県大会優勝記念

S25.10

第5回愛知国体（半田）県代表（米沢東高より、関・小島）。北は北海道、東北、関東の選手団の国体列車であった。車内では米沢工業の相撲部の選手が左右の荷棚にまわしを結び、ハンモックの代わりにして仮眠をとった。高校時代はクラスメートに助けられ、卓球練習に打ち込むことができた。親には勝って口説かれ（遠征費がかかりすぎる）負けては叱られ（なんのために練習しているのかと）通しの3年間であった。

S26.6 社会人1年目、秋田営林局実業団に入り、各種大会に出場していた。少し遅れて秋葉コーチも入局した。

S26.10 第6回広島国体（呉）の県代表（関と母校からの小島）。開会式後に原爆ドームを訪れ、その悲惨さに驚く。米を持参しての遠征であった。



秋田営林署時代

S27.10 第7回宮城国体（仙台）の県代表（関と母校からの黒田）。母校の後輩達が仙台まで応援に来てくれた（妹他3名）。

S28.4 電々公社に入社。

S28.9 電々公社全国卓球大会（札幌）に東北代表で出場。シングルス準優勝であった。全国大会出場者が何人かいてレベルの高さに驚いた。

S54.6 米沢市スポーツ少年団の結成と同時に、指導員の補助員となる。団員のお母さんの中に高校時代卓球選手として活躍された方が数人おられたので「母の会」を結成し、レディース大会その他各種大会に卓愛会として出場した。

S61.7 全国レディース大会（前橋）に県大会に優勝して卓愛会選抜チームで出場。第1回大会から挑戦するも県大会では毎年準優勝で涙をのんでいた。苦節6年、念願かなって初めて県代表となる。マイクロバスをチャーターし、子供6人連れの遠征であった。

監督：小笠原富雄 選手：小笠原、今井、遠藤（ミ）、本田、近藤、竹股、山川、遠藤（法）

個人戦でダブルスの近藤・竹股組が第3位。

- S62.8 セブン・イレブン全日本クラブチーム卓球選手権大会（東京）に卓愛会選抜チームで出場。ベスト8まで進出したが、仕事のため準々決勝を棄権して帰省した。  
監督：小笠原富雄 選手：小笠原、今井、遠藤（ミ）、本田、安藤
- S63.9 安田火災カップ・ラージボール第1回全国卓球大会（富山）に夫婦で混合ダブルスに出場。会場で初めてラージボールを打ち、相手のコートに届かず、不安を抱えての出場であったが、一試合ごとにボールに慣れ、優勝することができた。第1回から第3回大会まで60歳代混合ダブルスに夫婦で優勝することができたが、その後は勝ち運に恵まれなかった。しかし、第1回大会から現在まで連続して出場している。
- H1.8 山形県レディース大会で優勝。県代表として卓愛会選抜チームで全国大会（佐賀）に出場。米沢市制100周年、佐賀市も100周年ということで高橋米沢市長のメッセージと花笠を佐賀市に寄贈して喜ばれた。レセプションでは全員で花笠踊りを披露し、会場を盛り上げた。  
監督：小笠原富雄 選手：小笠原、今井、遠藤（ミ）、皆川（文）、本田、岩田
- H1 安田火災カップ・ラージボール第2回全国卓球大会（新潟）で、夫婦で60歳代混合ダブルス優勝。
- H2 安田火災カップ・ラージボール第3回全国卓球大会（秋田）で、夫婦で60歳代混合ダブルス優勝。
- H4 ねんりんぴっく山梨大会に、夫婦で県代表として出場。
- H6 ねんりんぴっく香川大会に、夫婦で県代表として出場。
- H8 ねんりんぴっく宮崎大会に、夫婦で県代表として出場。夫婦賞を頂く。
- H9 ねんりんぴっく山形大会に、県代表として出場。
- H11 第11回全国スポーツレクリエーション大会（仲縄）に卓愛会選抜チームで出場。
- H14 第15回全日本ラージボール卓球大会（山口）で、女子ダブルス70歳代第3位。
- H15 第16回全日本ラージボール卓球大会（高知）で、女子ダブルス70歳代第3位。
- H16 第12回世界ベテラン卓球選手権横浜大会・ラージボールヨコハマ2004で、女子シングルス70歳代第3位
- H17 第18回全日本ラージボール卓球大会（北九州市）で、女子シングルス70歳代第3位。
- おわりに  
卓球を始めてから50数年、高校時代の秋葉コーチによる徹底した基本練習の積み重ねで、技術的なことは勿論、努力・勇気・耐えることを学び、それを教訓として今まで生きてきたと思う。これから先、何歳まで続けられるのか分かりませんが、仲間との輪、和、話を大切に、そして若い人たちの邪魔にならないようにして、楽しい汗を流したいと思っています。

## (12) 白根沢利雄

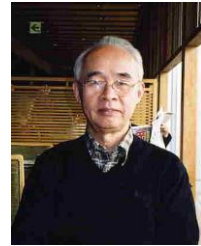
米沢卓球協会創立 60 周年おめでとうございます。

昭和 21 年に誕生したことになります、私の卓球活動もその時に始まりました。戦後の混乱期でしたが、興譲館でもクラブ活動として運動部ができて練習を始めました。当時は秋葉真治さんが別格の存在で、学校では米商が一番でした。「米商に追いつけ追い越せ」が合言葉でした。昭和 22 年新しい学校制度となり高校 1 年生となりました。その後も、旧制中学・新制高校が並列し、変則的な状態でした。

昭和 21 年に第 1 国体が大阪市宝塚公会堂で開かれました。

翌 22 年には石川県大聖寺町で第 2 回国体が開催され、置賜地区予選会、山形市での県大会がありました。置賜地区予選会のことは覚えておりませんが、県大会では当時鶴岡地区が強く、米沢では見たこともないスピナーズを駆使した鈴木文雄君が活躍しました。私はたまたま当時優勝候補だった鶴岡の秋葉君と 1 回戦で勝利し、そこから勝ち続けて鈴木君も破って国体代表選手になりました。当時は個人戦でジュニアの部に登録されたと思います。

国体には『国体専用列車』が運行され、米沢・山形・新庄・鶴岡で各種目の選手を乗せて金沢市に向かいました。宿泊地は山中温泉で、卓球会場には 1 人で行きました。試合では何回か勝ち上がり、ベスト 8 決定戦で優勝した愛知の松山君に敗れました。県の選手団長からお褒めの言葉が新聞に載り、全国ランキングも 10 位になりました。



翌 23 年には学校対抗が開催され、置賜地区大会・県大会に優勝して皇居内での全国大会に参加

しました。当時は、4 シングルス・1 ダブルスの 5 試合で、選手は川合悌次郎、宮原良吉、佐藤健二、白根沢利雄、ダブルスが川合・白根沢組でした。1 回戦は岐阜に勝ち、次の 2 回戦で前年優勝の栃木商高に破れました。その時の卓球誌には「紙一重の差で惜敗」と戦評にされました。

その後もダブルスは無敵で他の県大会等でも優勝しましたが、遠征費用等で学校からの許可が得られず全国大会を断念したこともありました。高校 3 年生になるとパートナーの川合君が卒業し、私の高校時代の選手としては終了しました。その後、大友、今井、滝沢等の後輩選手が活躍し、一時代を築き上げました。

当時は、米沢市内の学校間の交流も盛んで、「勝ち負けよりも皆で上手になろう」という意識が強かったと覚えています。また県大会も多く、山形・新庄・鶴岡・酒田への遠征を楽しみにしていました。当時は、学校代表というよりも米沢の代表という意識のほうが強かったと思います。

米沢での試合の準備で、組み合わせ等を行うのに卓球協会の西方さん、渡辺喜代次さんのお手伝いを、米商の主将だった三浦章一さんと一緒にしたことを思い出します。

高校卒業後は、中央大学に進み学生卓球連盟の仕事をしました。その 1 年後には鈴

木文雄君が進学し大活躍しました。他にも川口清三君（興讓館卒、故人）がいきなり大学新人戦で活躍したのには驚きました。川口君はその後、酒田出身の難波君と明治大学のエースになりました。日本卓球協会の重鎮、森武君（旧姓池田、新庄出身）も早稲田大学の選手として活躍したのも間もなくのことでした。

社会人になると仕事の関係で卓球とも疎

遠になりました。定年退職後になってから、地元の仲間と週1回2時間程度の練習をしています。ラバーの性能が良くなったのか、予想よりうまくプレーできることに気を良くしています。体の続く限り、続けたいと思っています。また、三浦さんの肝煎りで開催される親睦会で、お元気な秋葉さんや皆様とお会いできるのを何よりの楽しみにしております。

### (13) 高橋浩一

中学から始めた卓球が今では生活になくはならないものになっている。米沢勤務を離れてから早20年になるが、いまだに米沢協会の一員のような気がしています。それも米沢の皆さまから良くして頂いているからで感謝しています。今は山形まで高島の自宅から通勤していますが、それもあと一年で満了です。それからがまた卓球三昧の楽しい人生が待っていると思うとなんともうれしくなる。

思えば、高校を卒業して2年目になるとき米沢東高校の卓球部顧問の門脇廣先生よりコーチ要請の電話を受けたのが始まりで、5年ほど一緒に卓球をやった。そのときに現県卓球協会会長の佐々木幹男先生が同校に赴任され一緒に指導に当たり、何とかしてチームをインターハイ出場へと必死の練習をしたが準優勝どまりで果たせなかった。佐々木先生とは今も当時のことを語り合うことがある。

また、どうしても触れたいことは、皆川頼朗さんのことである。彼は私より1年後輩であるが、卓球ではずっと強かった。そ

して高校卒業まもなくで何もわからない私と



皆川さんを協会の役員として迎え指導くださった白田会長、高橋哲夫さん、斎藤俊也先生はじめそのほかベテラン役員の方には本当にお世話いただいた。よく練習の後には2人で酒を飲みながら卓球談議をしたものである。その彼が早くに他界されたことは残念でならない。

そして、米沢市卓球スポーツ少年団の結成にかかわり息子2人も小学校2年生のときからお世話になった。子供達には毎週日曜日の練習は楽しかったのか苦痛だったのかはわからない。たぶん両方だったろう。

「たかが卓球されど卓球」という言葉が卓球人の間ではよく使われるが私の人生もまさにそのとおりである。それは。自宅に卓球場をつくり、子供たちには卓球を押し付け、会社では職場を留守に大会参加をするなどご迷惑もおかけした。

最近は大リーグ卓球が盛んになり全

国大会ともなると2,000人も参加しマンモス大会となり開催期間も4日間となっている。仲間とともに毎年参加している。今年には岐阜での大会であったが平成21年頃に山形開催の構想もあり大会事務局の方に話を伺ってきた。

健康維持には、運動が大事といわれているが、生活習慣病であちこちおかしくなっているのも年のせいもあるだろう。今目標にしているのは一ヶ月のうち半分の15日を卓球ボールを打つことである。さいわい、山形市と南陽市のクラブに所属し、米沢市の練習にも時々参加させていただくなど環

境には恵まれているので、目標に向かって楽しくやろうと思っている。

卓球協会の仕事にもかかわりながら、卓球を私の生涯スポーツとしていきたい。

昭和37年 米沢工業高校卒業  
山形地区卓球協会副会長  
高橋 浩一



## (14) 鈴木一雄

「生まれ故郷 米沢から 卓球人生スタート ～ 現在まで」

鈴木 一雄 (58歳 現在 横浜在住 (株) アシックス勤務)

1) 履歴 興譲小学校 米沢第二中学校 米沢工業高校 中央大学 卒業

2) (現) 中央大学卓球部監督 関東学生卓球連盟副理事長

日本学生卓球連盟理事

<小学校時代>

私が卓球を始めるきっかけとなったのは、小学3～4年生の頃、私の義兄が帰省した際ピンポンして遊ぼうと言う事になり、町の卓球場が小学校の近くにあった事からそこでピンポンして遊んだのが始まりと記憶しています。

興譲小学校には、体育館の隅に一台卓球台が置いてあり昼休みコッペパンをかじり

ながら、卓球ネット等ありませんでしたので左右の台と台を30cm 離してピンポ

ン玉をセロファンの下敷きで打ち合い5本勝負?で勝ち抜き合戦をして遊んでいた。又ピンポンの勝ち抜きの人数が多く一度負けると休み時間内に自分の番に回って来ない事から、別な遊びで『くらんかい(現在調べているがこの遊びはどんな遊びかの説明はない 残念!)』簡単に言うと跳び箱の一番上の台様に人が床にひざを曲げかがんで伏す形の上を先頭の人が片手で飛んだり横っ飛びをしたりし、次々に真似をして飛ぶ、それが出来なかつたり失敗すると台替わりになってしまう遊びです、なぜその遊びが記憶に鮮明に残っているかと言うとこの遊びで身体のバランス感覚・運動神経の発達に大いに役立った事が後から解った



と言うことです。

#### <中学校時代>

米沢二中に入学する、当時かならずクラブ活動をしなくてはならず、どんなクラブに入部しようかと友達とたまたま体育館の卓球部の練習を見ていた所、卓球部の練習していた人から声をかけられその時友達が私のことを、小学校のピンポン遊びが上手だったと話してしまい、入部する様誘われ内心自信もあった事から卓球部への入部となる。

その頃米沢二中は、置賜地区では一番強く又卒業生の皆川先輩はじめ大変熱心な方がおられ、大会近くになると朝7時位から『朝練』と称してよく練習した事を覚えています。米二中卓球部監督(高橋勝廣先生)のあだ名が『だるま』。大変懐かしく思い出されます。

中学2年頃から試合でも勝つようになり市内の大会では先輩もいましたが上位に食い込むことが出来3年の時は、エースとして市内置賜地区では負けない様になりました。(当時ライバル中学校は『南原中学校』『上郷中学校』)ただ残念ながら県の大会になると、当時強豪谷地中学校があり勝つことが出来なく上位に行く事ができず、これといった成績はありませんでした。

(記憶に残る中学校選手敬称略で 長・相良・横尾・遠藤・上原・後藤など)

その頃から高校進学をどうするか考え、興譲館高校にするか又この地域で一番強い米沢工業校にするか迷いましたが、親が好きな高校に行ってもよいと言ってくれた事もあり結局卓球の強い米沢工業高校に入学する。

#### <高校時代>

1年生からレギュラーとなったことからよく練習し、かつ1年上に木村先輩(県内でも上位に行く実力ある選手)がおられ、私が2年・木村先輩が3年の時、念願のチーム戦を山形県で優勝することが出来た事と個人戦でもインターハイ県代表になり修学旅行をやめて、三重県伊勢市での全国大会に出場する事になった。(当時の記憶ある選手として、木村・斉藤両先輩・黒田・横尾選手等)

この時のインターハイの思い出は、団体戦で横浜商業校に負けますがそのチームには今回のインターハイ個人戦優勝した『河原選手→早大→プロ卓球選手』がおられ、この団体戦で戦う事はありませんでしたが、数年後の大学時代では、大学リーグ戦他数回戦う事になるとはこの時は思いませんでした。

私が3年となりこの時も県で団体・個人戦優勝する事が出来インターハイ長崎大会出場、この時は団体戦 銚子商業戦でトップ私が対戦相手『西村選手→専大』と戦い勝利した訳ですがこの西村選手が個人戦決勝まで進みびっくりしました。私の個人戦は、ベスト16決定でダブルス優勝の三浦選手(東京高輪校)にセットオール 19 対 16 でリードしていましたが、最後相手サーブで5本ともロングサーブを出され大逆転負け、今でも忘れられない思い出です。

(この年代で記憶残る米工選手は 黒田・横尾・上原・遠藤)

又、この年の国体東北少年男子予選で1チームしか代表になれない厳しい予選で強豪の宮城を破り代表になった事、本大会岐阜中津川国体では 優勝した京都に唯一私

が1失点を与え、東山校今井先生に会うと今でもその話が話題となっており印象に残る思い出です。(代表選手 鈴木(米工) 鬼島(山形南) 小山(日大山形) 渡部(谷地校))

いずれこの時代の山形県卓球協会は、特に高校生の強化をしていただき、合宿をよく行いました、我々と同窓生の女子選手は、後の世界チャンピオン『小和田選手』世界選手権出場の『井上選手』学生ダブルスチャンピオンの『大場選手』が育ったのもその成果だと思えます。(当時協会の方々としては、米工校斉藤先生はじめ 設楽理事長 山工校青木先生 城北校穂波先生 稲田コーチ酒田橋本先生 日大生真石さん等)

<大学時代>

お蔭様で 昭和 41 年中央大学にスポーツ推薦入学出来 1 年生ではレギュラーになれず、ようやく 2 年春よりレギュラーとなり関東大学一部リーグ戦に出場

結果大学時代通算 16 勝 13 敗 関東学生選手権 全日本学生選手権でダブルスチャンピオンになる事が出来、シングルスでは東日本学生 3 位、全日本選手権でベスト 16 とランクに入ることも出来た。昭和 45 年卒

業 卓球で飯が食えないと思い、スパッと卓球を止め仕事に専念、その後会社(アシックス)の関係で地方営業所勤務をつとめ、平成 6 年東京勤務となり、その頃に中大の監督要請あり学生時代お世話になった恩返しの思いで引き受ける。

現在監督暦 12 年関東学生リーグの一部に在籍しているものの、当初は最下位が多く入れ替え戦等大変だったが、平成 13 年に就任後初めてのリーグ戦優勝(これまで計 3 回の優勝) 最近は、関東および日本学生卓球連盟の役員をしている事もあり、今の大学生が昔と比べ弱くなったといわれるのが一番悔しく、これから日本卓球界又大学で活躍しようと思う選手は、ぜひ『世界を狙うといった目標を高く』そしてそれを『やりきるといった意思の強さ』を持って日頃から頑張ってもらいたいと念願してやみません。

最後に今回の機会を設けていただきました関係者の皆様に感謝申し上げ、改めて貴協会の発展を心よりお祈り致します。

又、大変な長文になってしまった事、かつ掲載しました名前等に誤りがありましたら深くお詫び申し上げます。

## (15) 伊藤誠二

米沢地区卓球協会設立 60 周年、誠におめでとうございます。私が卓球を始めたのは今から 45 年前の中学校 1 年生の時でしたが、その時から米沢地区卓球協会には大変お世話になっております。

中学校時代は新山中学校で島貫琢也先生

からご指導をいただきましたが、フットワーク主体の練習で、オールフォアで動いておりました。

その当時、山形県の中学校は山形地区の谷地中が強く、ベスト 4 に入るのがやっとと



いう状況でありました。

高校進学時には、先輩の木村稔氏のいる米沢工業高に行くか、ペアを組んでいたカットの高梨善廣氏と共に米沢商業高に行くか大変迷いましたが、自分の性格から米商を選択した経緯が思い出されます。米商では尾崎辰雄先生が指導にあたられており、物心両面にわたりお世話になりました。高校では地元米沢工業が山形県トップの座にあり山形南高・山形工業高らと争っており、米商は打倒米工を目指し日夜練習に明け暮れておりました。米商の練習場は薄暗い講堂で当初3台のコートを使って男女15名位で行っておりましたが、少しずつ強くなるにつれて増えていき、最後には6台になった記憶があります。

成績を思い出してみると、団体では米工には勝てず常に2位に甘んじておりました。個人では、米工の鈴木一雄氏(現、アシックス)が強く、山南の鬼島氏・山工の石垣氏らと競りあっておりました。

私は置賜地区では1年の時は3位、2年の時に初めて鈴木氏に勝って優勝し、3年時にも勝ちました。高梨氏と組んだダブルスでは、1年時2位、2年時優勝、3年時にも勝ち、猛練習の成果が出たと思っています。

山形県では、団体では3位が最高の成績で、ダブルスでは2年時3位、3年時2位であったと思います。シングルスでは、1年時ベスト8、2年時が3位、3年時に優勝することができました。また谷地高の渡部博久氏(現、山形電波高)には1年の時から絶対勝てませんでした。ライバル意識を持ち研究を重ねた結果、2年の新人大会で初めて勝ち歓喜に酔った思い出がありま

す。以後2年ほど彼には負けていない記憶があります。

最大の思い出は、高校3年の東北大会が霞城公園の新山形県体育館で行われ、あまり期待がなかった私が青森県勢をことごとく破り、準優勝を飾ったことでした。決勝では秋田商の熊地氏(後に世界選手権代表)の糸を引くようなカットを打てず完敗しました。

インターハイでは全国の壁は厚く3回戦がやっとでありました。

また高校生最後の県選手権混合ダブルスで米沢東高の皆川ちよ子氏(後に日新紡西新井で全国制覇)と組んで優勝したことが懐かしく思い出されます。当時米沢東高は県でも上位にランクされており皆川文子氏(現在ラージボールで活躍中)らの選手がおりました。

日頃の練習で山形大学工学部の後藤和久氏(現、山形学院高コーチ)らと練習をさせていただいたこともプラスになったと思っています。高校生最後の2月に第1回設楽杯争奪卓球大会が旧山形県体育館で行われ、並み居る先輩を破り優勝したことが印象に残っています。

高校時代の活躍は、自分の努力はあったものの、県協会での強化合宿、毎週のように行われた強化練習会のおかげだと思っています。青木茂明氏(現、県協会副会長)はじめ、若い先生方の熱き指導が我々を育ててくれたと感謝しています。

高校卒業後の進路について大学からの誘いもあったが、経済的理由から地元の山形相互銀行を選びました。この時、銀行の高橋幸蔵氏(現、シベール)には大変お世話になったことが現在の自分があると言っても

過言ではないと思っています。社会人になって、最初の支店が長井支店となり、長井工業高でコーチを兼ね練習を積んだことが甦ります。社会人での思い出は、第1回県社会人大会で優勝し第1回全国大会に出場し、3回戦で優勝した木村興治氏(現、日卓協専務理事)と対戦したことであります。また昭和42年、新山形県体育館で開催された全日本実業団選手権大会に山形相互銀行が軟式に出場し、男子が3回戦、女子は4回戦まで進み、県内を沸かせたものである。長井工業高では鈴木俊次先生、齋藤悟先生(現、県協会副会長)と共に汗をかき、3年目で初の優勝(ダブルス)をさせた思い出が残ります。長井での4年半は国体・全日本社会人・全日本実業団・全日本軟式・全日

本選手権大会など数々の試合に出場し、充実した期間でした。その後の長井工業高の活躍は言うまでもないが、私が礎をつくったものと自負しています。この間、長井地区卓球協会の皆様、そして米沢地区の白田会長はじめ穂保先生、高橋哲夫氏、齋藤俊也先生、佐々木幹男先生(現、県協会会長)、亀岡剛先生(現、米沢地区会長)には力強いご支援を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

以上が中高校時代及び社会人当初の思い出であります。現在、県の強化部長として、卓球界に携わっており、山形県卓球界の発展のために尽力をつくしたいとおもっています。

---

## (16) 石川宏

私と卓球との出会いは中学でした。学校の部活動として何気なく始めた卓球でしたが最終的に社会人実業団までプレーすることとなりました。中学校時代は試合に出てもせいぜい一回戦を突破することがやっとで、結果は全く残せませんでした。

高校進学後、本格的に卓球をやりたいという気持ちがふくらみ卓球づけの毎日が始まりました。練習は、大きく基本練習、課題練習、ゲーム練習に分けて行いその中でも基本練習は、毎日やっていると、平気でミスをしたり、何も考えずにやってしまう傾向があります。そこで私はフォアクロスを打つにも打ち負けて相手より先にミスをしたくないように頭の中でカウントをとるような気持ちでやるようにしました。

課題練習ではサービス、レシーブ、3球目に関する練習が多く、サービスについてはたくさんの



種類のサービスを持っていたとしても大事な試合で相手が強ければ強いほど自分の使えるサービスというのは限られてしまうということを感じたので、試合で使える自分の得意とするサービスをいくつか徹底的に練習しました。時間をかけた三球目攻撃の練習においては、三球目を思い切って打てばよいというものではなく、思い切って攻撃できるものとそうでなく一本つないでおくべきボールとの適切な判断ができるようにと心がけました。こういった練習をする

ことによって、その結果高校2年の国体県予選では県3位になることができたのです。しかし高校3年のインターハイ県予選では代表決定戦で敗れ目標だったインターハイに出場することはできませんでした。その悔しさから大学に進学し卓球を続けることを決めました。

進学した中京大学は部員数80名でメンバーに入るだけでも大変でしたが大学3年時には全日本大学対抗卓球大会のメンバーに選ばれ大会ではベスト16に入ることができ、昭和52年大学を卒業して実業団信号器材に入社し、その年の全日本総合団体卓球選手権大会ベスト8、日本卓球リーグ後期優勝することができました。



中学から実業団までの卓球生活を通してたくさんの人と出会い、関わりあってたくさんを経験し、強く生きる力、何事にもチャレンジし目標を持ってあきらめず努力することの大切さを知ることができ、卓球を続けて本当によかったと改めて実感しています。

## (17) 鈴木孝行

私が卓球と出会ったのは小学4年の時、今から40年ほど前である。その頃はもちろんスポ少など無く、子ども達の一番人気のスポーツは野球、遊びはパンパイ(メンコ)の時代。毎日朝から晩まで野球やパンパイに興じていたのだが、ある日、クラスのガキ大将A君から「遊びに来い」と誘われ、一大決心で遊びに行った。なにせ彼はクラスのボス。手下を何人か連れケンカも強い。こわごわと彼の住んでいる興望館へ行くと、卓球台が二台さん然と輝いていた。さらに、彼らの卓球の上手なこと！それ以来、毎日のように私は卓球をしに遊びに行った。カコーン・カコーンという心地良い響きに加え、ケンカでは味わえない勝利の喜びと達成感、卓球を通して彼らと仲良くなれたという充実感、全てが私を虜にした。

小学6年にもなると、卓球ができる場所を探し求め、ラケットを片手に友達と出歩いた。特に印象に残っているのが、山大工学部の卓球場である。木造平屋の古い小屋、卓球台が3台ほどあっただろうか。朝5時起き卓球少年達が壊れかけた戸の隙間からこっそりと忍び込み、いざ卓球！静かな工学部の中でここだけはキャーキャーワーワーと子ども達の歓声が朝早くから響いていたのである。思う存分卓球で遊べる喜び。大人の目を気にしない自由な楽園。もちろん大木(弘一)君もそこにいた。共に不法侵入の共犯者である。主犯は誰か今は謎に包まれている。しかし、幸福はいつまでも続かないことをやがて知ることになった。見つかったのである。それも朝帰りの山大卓球部の学生に……。その後どうなったかは想

像に任せよう(私もあんな学生になりたくて山大工学部に入学した)。

さて、話は替わって一球入魂の米二中時代、(佐藤)敏夫先生との出会いである。あの頃はトレーニング係の先輩がいて、それは厳しいメニューだった。総勢百人を越す部員、生き残るため競争に勝つしかない。足立(幸一郎)さんからも石の上に2時間正座というありがたいご指導を受けたこと、昨日のこつのように思い出す。そうだ、玉拾いはいつも足立さんの近くにいた。サーブや台上ドライブを盗みたくて。皆川(故、頼郎)さんとの延々と続くフットワークは

辛かったなあ。敏夫先生も若かった。下着姿で頭にタオル。唾を飛ばしながらいつも叫んでいた「全国制覇!」。みんな本気になって目指していたあの頃が本当に懐かしい。卓球バカの集団、二中卓球部。講堂で過ごしたあの3年間で今の自分をつくってくれたのだ。今になって一球入魂のありがたさ、すばらしさを痛感している。

米沢市卓球協会設立60周年、誠におめでとうございます。今後とも、米沢の卓球バカを一人でも多く育てるために、子ども達へのご指導宜しく願います。

---

## (18) 後藤直思

「米沢地区卓球協会」設立60周年、まことにおめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

この度の記念事業の一つとして、現会長の亀岡先生より原稿を依頼され、何を書けばいいのか悩みましたが、おそらく一番亀岡先生に迷惑をかけたであろう私の高校時代の思い出を綴りたいと思います。

中学より卓球を始め、米沢市内で強い学校に憧れた私は、迷わず米沢中央を選びました。中学時代より高校の練習に参加していたので、指導の上手なOBや強い先輩方と上位を目指せると思ったからです。しかし、入部時の米沢中央は常に置賜地区1部に名を連ねていた時代とは違い、3年生不在、新入生の大半が初心者、置賜地区3部転落の厳しい状況だったと思います。そこから亀岡先生の厳しい練習計画が始まりま

した。朝練、長期合宿、遠征、休みは大会翌日のみという、まさに卓球漬けの毎日でした。私は先生や練習に対する反発と抵抗を繰り返し、

無断欠席から一時退部に至ったこともありましたが。この時は熱心に私をすくい上げてくれた亀岡先生と、仲間たちの励ましが支えとなり、挫折しそうな自分を乗り越えることができましたと感じています。そのお陰で置賜地区完全制覇、個人戦2種目で全国大会出場を果たすことができました。くじけそうになった事もありましたが、目標に向かって部員が一丸となったときは、誰にも負けない練習量が自信となり、不可能を可能に変える力があることを学んだと



思います。

亀岡先生には、毎日夜まで及ぶ時間や休日を全て返上して練習環境を整えてくれた事が、どれほど大変な事だったのかと頭があがりません。また、強い諸先輩が練習相手を務めて下さったり、米沢中央卓球部の歴史と伝統に深く感謝いたします。現在の私は仕事に追われ卓球とは縁遠い状況ですが、自宅に飾られている元篠原米沢地区卓球協会長よりいただいた表彰状を見るたびに、いつか恩返しをしようと思っています。今の私を育ててくれたのは、卓球との出会い始まり、亀岡先生に助けられ、仲間達と苦しみや喜びを分かち合うことができた



いう、高校時代の思い出があったからだと思います。

最後になりますが、これからも「米沢地区卓球協会」がますます発展することを祈念いたします。

---

## (19) 松田尚子

米沢地区卓球協会 60 周年、おめでとうございます。小学校 4 年春（昭和 55 年）に米沢市卓球スポーツ少年団入団以来、大変お世話になっております。

### ① 米沢市卓球スポーツ少年団に入団・・・ ・（小学 4 年）

当時、団長である小笠原富雄先生、コーチの皆川頼郎先生、高橋浩一先生をはじめとする多くの先生方から、姉とともにご指導頂きました。その後、弟も入団し、毎週スポ少に行くことがとても楽しみになりました。

特に、練習の前に、毎回 大きな声で読んでいた誓いの言葉は今でも鮮明に覚えています。

誓いの言葉

1. 心と体を鍛えしっかり技をみがき

ましよう

1. 礼儀と規律を守り人に迷惑をかけないようにしよう
1. 常に正しいおこないをして、立派な人になりましよう

また、当時テレビでみた全日本卓球選手権大会女子シングルスで、嶋内よし子選手が優勝した試合は、フォアハンド、ショート、バックハンド、フットワーク、サーブなどとても印象に残っています。

主な戦績：

昭和 56 年度山形県卓球選手権大会小学校女子シングルス第 3 位（小学 5 年）

昭和 58 年 設楽杯争奪卓球大会ホープスの部第 2 位（小学 6 年）

### ② 米沢市立第 3 中学校時代

大会前は、緊張で食べられないことが多かったのですが、母は食べやすいものを工夫

し、またどんなときも応援してくれたことがうれしかったです。

主な戦績：

昭和 59 年度山形県卓球選手権大会カデット女子シングルス第 2 位（中学 2 年）

昭和 59 年度全日本卓球選手権大会カデットの部出場（中学 2 年）

第 8 回山形県中学校新人体育大会卓球女子シングルス第 3 位（中学 2 年）

昭和 60 年 設楽杯争奪卓球大会カデット女子シングルス第 1 位（中学 2 年）

第 25 回山形県中学校総合体育大会卓球女子個人第 2 位（中学 3 年）

昭和 60 年度山形県卓球選手権大会ジュニア女子シングルスベスト 8（中学 3 年）

### ③ 山形県立米沢興譲館高校時代

思うような試合をできないことが多かったのですが、調子の悪いときなども先生方や先輩、後輩、友人などに助けて頂き卓球を続けられたこと、また高校最後の年と思い、挑んだ県大会で男女団体 3 位 ・ダブルスでインターハイに出場できたことは、今でも大きな心の支えになっています。

県大会ダブルス決勝、16-19 とリードされていた場面、変化サーブで 5 本（当時 1 セット 21 点 サーブ 5 本交代）連取し、逆転で 1 セット先取、結果優勝できたことは、思い出深いものとなっています。その 5 本のサーブはとても集中して出せたように思います。あとで、そのときの試合のビデオテープをみて、私のサーブに回ってきたときに、「サーブで 5 本！」という父の声援が録音されていたのを聞いてとても驚きました。

主な戦績：

第 39 回山形県高等学校総合体育大会卓球女子団体第 3 位 ・シングルスベスト 8

ダブルス第 1 位（木村圭子・松田組）（高校 3 年）

昭和 63 年度全国高等学校総合体育大会卓球女子ダブルス出場

### ④ 東北薬科大学

卓球をやっていた御蔭で、仙台でも様々な交流がありました。

主な戦績：

平成元年度東北学生卓球連盟春季リーグ戦女子Ⅱ部敢闘賞（大学 1 年）

第 32 回全日本薬学生卓球大会 S 第 3 位 ・W 第 2 位（1 年）

第 33 回全日本薬学生卓球大会 S 第 3 位 ・W 第 1 位（2 年）

第 34 回全日本薬学生卓球大会 団体 1 位 ・S 第 2 位 ・W 第 1 位（3 年）

第 35 回全日本薬学生卓球大会 団体 2 位 ・S 第 2 位 ・W 第 2 位（4 年）

### ⑤ 米沢市立病院薬剤部勤務

地元、山形県で開催された全日本社会人選手権に参加しました。

主な戦績：

平成 7 年度山形県社会人卓球選手権大会ダブルス第 1 位（加藤博巳・松田組）

平成 7 年度全日本社会人卓球選手権大会出場 佐藤利香組と対戦

平成 12 年度全日本社会人卓球選手権大会



(山口) 出場 高田佳枝選手 (日本生命)

と対戦

平成 13 年度山形県社会人卓球選手権大会  
ダブルス第 2 位 (林 香織・松田組)

平成 13 年度全日本社会人卓球選手権大会  
(山形) 出場 梅村・岡崎組 (日本生命)  
と対戦

⑥ 今後は・・・

誓いの言葉を胸に、一生懸命やっていきたいと思っています。

米沢地区卓球協会関係者並びに、多くの指導して頂いた先生方へ感謝申し上げます。

## (20) 皆川武司

私が卓球を始めたのは、小学校の 2 年生ぐらいだったと思う。父の影響もあって、米沢市卓球スポーツ少年団に入った。その後も、いい指導者の方や仲間に恵まれて、高校を卒業するまで 2 度全国大会規模の大会に出場することが出来た。米沢における卓球の思い出の中でも特に印象に残っているのは、当時の有名選手を招待しての実技指導である。当時学生チャンピオンクラスだった海鉦選手、全日本王者の斎藤清選手、女子世界王者の曹燕華選手夫妻 (中国)、実業団トップの渡辺武弘選手、全日本混合ダブルス王者の村上夫妻、そして不慮の事故で亡くなられた元世界王者の長谷川信彦選手等々と、私の知っている限りでも錚々たる顔ぶれであった。斎藤選手のドライブや曹燕華選手のサーブを生で見たり受けたときの驚きは今も忘れられない。また長谷川選手の卓球に打ち込む姿勢をみて、世界チャンピオンになるにはこれだけ思い入れがないと無理なんだと子供ながらに感じた。有名選手を招待するのは大変だったと思うが、他の地域にいたらなかなか出来ない経験をさせて頂き良かったと思う。

また、苦しかった思い出としては、高校

1・2 年時の県選抜合宿があげられる。週末の 3 日間で行われることが多かった



と記憶しているが、朝のマラソンに始まり、夜の 1,000 本ラリーまで、もうくたくただった。両足の裏全体にマメが出来たのも初めての経験だった。特に私は練習時間が多い高校に通っていなかったもので、普段の部活の練習量は他高校の選抜選手達の半分以下であり、体力的に非常につらかった。それでも週明けには英単テストがあるので、眠い目をこすって英単帳と格闘したが………睡魔には勝てなかった。ただ、最後には苦勞を共にした仲間と京都国体参加といういい思い出が出来た。

いま思えば、私がそこそこの成績を残せたのも、たくさんの練習相手に恵まれたからだと思う。小さい時から、社会人の練習には毎週のように混ぜてもらっていた。ある意味それは父が遺してくれた財産であり、父に感謝するとともに、多くの仲間とたくさんの思い出を作れて本当によかったと思う。そのほかにも親子 4 人でダブルスが出来たり、高校の地区大会でシングルス

の決勝を男女とも興譲館で占めたりと思いは尽きないが、卓球を通じ、若き日の大切な時間を無駄にすることなく充実して過

ごせたことに心から感謝している。

米沢地区における卓球の今後の益々のご発展、心より願っております。

---

## (21) 田中和征

卓球の思い出は、たくさんありますが、その中から一つ書かせて頂きたいと思いません。

卓球を始めての頃は、小学 5 年生の時でした。私ごとについては知らない人もたくさんおられると思いますが、身体に障害をもっていました。それは、5 歳の時重度の火傷に遭い、片足の指 5 本を切断していたことです。

身体にハンデを抱えていても、人一倍負けず嫌いだった私は、「絶対他の人には負けたくない」という意思がありました。卓球というスポーツに巡り合い、楽しさを知り、たくさんの卓球関係者の方々にご指導を受けたことを、今でも思い出します。そのたくさんの人達に巡り合い、支えて頂いたおかげで、私もたくさんの大会で活躍することが出来ました。高校 3 年生の時には、東北大会にも出場できました。これも皆様に支えて頂いたおかげと感謝申し上げます。特に、亀岡先生や金子コーチには大変

お世話になり、中学生の頃から指導して頂きました。米



沢中央高校で卓球を続けられた事は、今でも私の中での誇りです。

現在、卓球をしている人はたくさんいると思います。障害を持った私でさえ卓球を楽しみ、それなりの成績を残すことが出来ました。卓球で、より一層上を目指すのためには、一生懸命ひとつの事に集中し「何事もやればできる」という気持ちで取り組み、自分の目標を達成できると思います。ぜひ、自分の気持ちと向かい合ってその時を完全燃焼して頂ければと思います。

最後になりますが、私は卓球をして本当に良かったと思います。卓球をやっている小・中・高校の皆様の活躍に期待して、私の卓球の思い出を締めくらせて頂きたいと思えます。

---

## (22) 高石恵理

私が卓球を始めたのは小学校 3 年生の時でした。出身が長井市のため、6 年生の時に国体強化選手に選ばれました。その頃は「国体」というものが全く解らず、目標は

県大会で優勝し全国大会に出場して上位を目指すことでした。そして、国体を意識したのは高校に入ってからでした。国体予選というように、国体を意識する試合があり、

米沢地区選抜や県選抜に選ばれたりするようになって「国体選手になりたい」「べにばな国体に出場したい」と思う気持ちが確実に大きくなっていきました。

私が高校3年生の時にべにばな国体が開催されるということで、合宿や遠征等日に日に卓球に関わっていく時間が増えていきました。九里学園では週に1時間、研修旅行（修学旅行）に行く所の研究を行っていたのですが、研修旅行と遠征が重なってしまい、研修旅行に行けなかった私は皆と違って卓球の遠征レポートを提出したのを覚えています。高校3年生になると自分の役割が「ダブルス」だということで、練習内容も絞られていきました。ダブルスは必ず勝つ、ダブルス勝負という思いが強くなり、そのためサーブ・レシーブ・3球目・フットワークの練習を集中的に行いました。1番の思い出は、県の練習会の時に九里学園の大滝先生（べにばな国体時は少年女子コーチ）が、ボールを拾うあみを持ちネットの上数センチの所で横にし、その下をくぐらせサーブ練習をした事が強く思い出として残っています。それだけでなく、朝練習で毎日サーブ練習を行っていました。サーブ練習にどれだけの時間を費やしたか覚えてはいませんが、結果として残ったことは確かでした。

べにばな国体で入賞するには、インターハイでランキングに入っている土佐女子高校の選手3人からなっている「高知県」に勝たなければならなく、ハードルが高かったのですが、ポイントするごとに会場中が盛り上がり、調子が上がっていくのを実感していました。いつもならミスをするとな落ち込んでしまうのに、ミスしても気になら

なくなり、それどころか「次はミスしない」という思いがあり、負ける気がしませんでした。あの会場の雰囲気は何とも例えようがありませんが、1試合1試合良い気分で戦えましたし、ダブルス、シングルス共に“全勝”、結果も“5位”と最高の国体でした。今、思い出してもあの様な雰囲気で試合できたことは、最高の思い出であり宝物です。

この結果を出せたのも、いろいろな方々の支えがあったからだと思っております。小学校のころから国体の強化選手として色々な経験をさせて頂き、また、技術の向上を図ってくださった卓球協会、指導してくださった先生方、地域の皆様、その他たくさんの方々に心から感謝しております。



宮崎インターハイにて  
左；大滝先生 中央；高石選手  
右；横山選手

高校時代の栄光と貴重な経験をさせて頂きましたこと、たくさんの方々に出会えたこと、また今も卓球に親しんでいる今の私があるのも皆様のお陰だと思っております。本当にありがとうございました。最後に、米沢地区卓球協会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

## (23) 伊藤知佳

原稿を依頼されて、私が卓球を頑張っていた頃のことをいろいろと思い出しているところです。私が卓球を始めたのは、三沢西部小学校の4年生の時です。当時は、鈴木孝行先生が在職しており、先生がやっているスポーツ少年団に入団しました。毎週土曜が練習日で、その日が来るのを楽しみにしていたのを思い出します。試合に出始めたのは、米沢市立第三中学校に入学して、卓球部に入部してからです。その頃は、佐藤敏夫先生の指導の下、先輩達は団体戦などで優勝をしており、とても活気のある環境でした。いよいよ3年になり、部長を任せられた重圧もあり、最後の中体連では、南原中学校に破れ、県大会に行くことができませんでした。指導して下さった先生や先輩方に申し訳なく、自分自身にいらだち、大泣きしたことを覚えています。

その後、もっと強くなりたい、勝ちたい気持ちから、旧米沢女子高校の大滝勤先生のクラブチームで練習させて頂くことになりました。行った早々、先生は「そんなにいい体格をしているのだから、もっとスケールの大きい卓球をしなければいけない。」と言われ、今まで使用していたラケットではなく、「これを使いなさい。」と先生の使用していたラケットを惜しげもなく、私に下さいました。

その後、旧米沢女子高校に入学した私は、インターハイ出場を目指して、日々猛練習をしました。体重も一ヶ月で7キロ減り、家族や友人からも驚かれました。米女の練

習は、動く練習が多く、長時間の練習の日などは足の裏に水が溜まって潰れたり、酸欠になって倒れたりしました。本当に練習は辛かったけれど、毎日確実に強くなっていくのも分かったし、充実もしていました。

高校2年のインターハイ予選を前に先生から、「知佳は、ダブルスで県優勝し、インターハイ出場を狙おう」と言われ、特別の練習を約3ヶ月間繰り返しました。他の部員がいろんな練習をしている中、私は毎日同じ練習を繰り返しました。きっと、これをやっていけばインターハイに出られると信じて……………。



左が伊藤選手

その結果、県大会ではダブルスで優勝することができました。思った通りの試合展開で心地良くプレーできたことを覚えています。夢のインターハイも、3回戦まで勝ち進み、全国大会でも思う存分できたことは一生の思い出です。

末筆ながら、記念誌に私の思い出を寄稿させて頂いたことに感謝致します。

## (24) 横山和広

この度、米沢地区卓球協会が60周年を迎えられましたことに心よりお祝い申し上げます。

さて、私が福島県の会津若松四中を卒業し、一人で田舎から米沢に来た時に思った事は、卓球を続ける悦びより不安な気持ちが強かった事を覚えています。しかし、私の心配を他所に、良き指導者、同期、先輩、後輩に恵まれ、思う存分「卓球」に打ち込む事ができました。当時、先輩には全中団体優勝メンバーの和久井怜先輩をはじめ、福永哲弥先輩。同期には、米沢四中出身の遠藤忍、青森山田から転校してきた、横沢智樹、吉谷卓朗といった選手がチームにいました。試合に出場しチームに貢献する為には、強い先輩方はもちろん、同級生に勝たなければいけないという状況にあり、良い意味で身近に「ライバル」が存在し、常に刺激を受けながら練習に励んだ事が自分の実力を向上させてくれたのだと思います。

米沢中央高校在学3年間の中で一番の思い出は、高校2年のインターハイ県予選団体決勝です。高校を卒業し大学でも様々な試合に出場させて頂きましたが、この時ほど緊張感があり、頭が真っ白になりながらプレーした試合は、なかなかありませんでした。私は、この試合、板垣孝司監督から和久井先輩とのダブルスと、ラストを任せられました。決勝の対戦校は前年度覇者の山形工業が相手でした。前半で和久井先輩が1点取り、ダブルスは苦しみながらも何とか勝利し、最終的にラストの私に回って

きました。相手は主将の佐藤選手でした。佐藤選手には公式戦、練習試合共に一度も勝った事がなく、正直自信がありませんでした。しかし、

ここで勝てば「米沢中央高校初優勝」。同時に「インターハイ初出場」がかかっていると思うと、死に物狂いで勝ってやろうと思った事を今でも鮮明に覚えております。苦しみながらも何とか勝利し、ベンチと応援席に向かってガッツポーズをした瞬間の鳥肌は、一生忘れる事はないでしょう。振り返ってみますと、この勝ち星は自分が勝ち取ったものではなく、様々な協力者によって一つ一つ積み重ねられたものと思います。それは、強化等色々な面から協力して頂いた米沢市卓球協会の皆様、OBの諸先輩方、並びに、学校関係者のお陰で勝ち取ることができました。そして、チームのために裏方に徹し、練習相手をする者、ボールを拾う者などすべての部員が出場する選手を気遣い「勝利」に向かって協力して頂いたお陰でした。「卓球」は個人競技ではありますが、優勝した瞬間はまさにこの領域を越え個人競技の卓球が「チームスポーツ」となる一瞬を垣間見る事ができました。

最後になりましたが、米沢地区卓球協会の皆様はじめ亀岡総監督、板垣監督、諸先輩の方々、同僚、後輩達には、言葉では言い表せないほど感謝しております。本当にありがとうございました。また、米沢地区卓球協会60年誌発刊にあたり、米沢地区卓球協会の更なる発展を祈念致します。





## あとがき

米沢地区卓球協会が昭和21年に、正式に設立されてから今年で60周年の遺暦を迎えたことになる。この記念すべき年に、記念式典と記念誌発行を計画した次第であるが、多くの関係各位には式典参列と記念誌への玉稿を頂き感謝申し上げます。

実は協会設立以前から、米沢地区では卓球活動が盛んに行われており大正末期から昭和初期にかけて、東京の大学に進学した学生の指導により中等学校の生徒達が活躍していた模様である。幸い当時の状況を記した米沢商業学校関係者の記録があり、また更に昭和初期には全国大会出場のための「米沢卓球協会」なる組織があったことも記述されている(本文「協会のあゆみ」参照)。したがって本誌も昭和初期から戦前までの活躍状況も記述することが出来た。

また、昭和21年の設立当時の詳しいことは、はっきりせず概観になったが、なにしろ上部団体、学校組織、体育連盟等の組織そのものも定着していない時代である。各種記録が整備されず大変苦労したが、特に全国大会関係部分は全国組織記念誌や当時出場した選手自身からの「思い出」を参考にさせていただいた。

昭和30年以降のこととなると、米沢地区卓球協会関係書類や試合成績表など私の手元にも保管されているものも多数あり、また他の団体の書類などを参考にして内容についてはそれぞれ確認をして書いたつもりであるが、もし誤りに気がついた方はお知らせ願いたい。

現在「米沢地区卓球協会」は亀岡会長を初め、関谷理事長を中心として活発な活動

をしている。一般(企業・クラブなど)、高校、中学、スポ少等それぞれの分野ですばらしい成果をあげ、特にラージボールの活動は、県内はいうに及ばず全国的にも名を馳せている。更に今後の活躍が期待される。

ただ残念なのは、ここ最近県大会など大きな大会の開催が無いことであるが、来年平成19年には東北レディース大会が米沢市で開催される予定であり、大会の成功を期待したい。

この記念誌を作成するに当たり次の「記念誌編集委員会」を組織し、本年2月に第1回編集委員会を開き以後月に1回の割合で計10回の委員会を開催、それぞれの分野を担当して完成したものである。

最後に御協力頂いた皆様に心より感謝申し上げます。

[齋藤俊也 記]

### 編集委員会

委員長	齋藤 俊也		
委員	小笠原富雄	亀岡 剛	
	樋口 哲弘	関谷 知樹	
	金子 雅明	大滝 勤	
	佐々木健一	皆川 文子	
	小笠原まさ子		